

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 16 CONTENTS

Cave ruins in Kagoshima Prefecture.

Yubasaki Tatsumi

Supplement to the Komaki site and some consideration

The research department of Kagoshima Buried Cultural Property
Reserch Center

The pit dwelling house which is in the Kofun period excavated
in Komaki remains in Kagoshima Prefecture

Kawaguti Masayuki

Investigation of Uwai Castle Ruins in Kirishima City

Kurokawa Tadahiro

Study on the route between Satuma koku Taki and Nodae

Higashi Kazuyuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the
4nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2023

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第16号

鹿児島県の洞穴遺跡の集成
—洞穴遺跡の概要と調査の状況—

湯場崎 辰巳

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討
(公財)埋蔵文化財調査センター 調査課

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広

薩摩国高城—野田間の道筋について

東 和幸

令和4年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2023.10

研究紀要・年報

縄文の森から

第16号

二〇二三

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』第16号 目次

鹿児島県の洞穴遺跡の集成一洞穴遺跡の概要と調査の状況一

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 3

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討

(公財) 埋蔵文化財調査センター 調査課・・・・・・・・ 17

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之・・・・・・・・ 35

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広・・・・・・・・ 41

薩摩国高城一野田間の道筋について

東 和幸・・・・・・・・ 49

令和4年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広

Investigation of Uwai Castle Ruins in Kirishima City

Kurokawa Tadahiro

要旨

霧島市にある上井城跡は、これまでにいくつかの略図があるものの、実態を把握出来るものが限られていたために不明瞭な点も多かった。今回、踏査を基に縄張り図を作成したことにより、城郭としての基礎的情報を示すことが出来た。

キーワード 中世城館 上井城跡 縄張り図

1 はじめに

上井城跡は、霧島市国分上井に位置する中世山城である(第1図)。島津氏の老中として活躍した上井覚兼が誕生した城である。この上井覚兼は、『上井覚兼日記』を記した武将(天文14:1545年~天正17:1589年)で、この日記は、当時の武士の生活や風習、城に関する当時の様子を知る上で一級の史料である(註1)。近年新名一仁氏によって現代語訳が刊行(新名2020ほか)されると、改めてその価値や重要性が認識されてきている。

さて、筆者が勤務する鹿児島県立埋蔵文化財センターは上井城跡に近く、この城跡の山裾部を通過して出勤している。身近な城館の1つである。しかしながら、不明瞭なことも多い。せめて縄張り図を作成して研究の足がかりを作る必要を感じた。このような経緯から、小稿の目的は、現状の周知化の為に縄張り図を作成し基礎的情報を整理することである。

2 上井城跡の歴史

『国分郷土誌』によると、上井城跡が文献等で確認出来るのは4項目あり、これに明治10(1877)年の西南戦争が加わる。はじめに、郷土誌等の記述とその出典を確認していきたい(註2)。『国分郷土誌』では、まず、築城に関して、「その昔、踏入五郎弘氏がこの地を

領し、その子孫が上井姓を名乗って城主になったと伝えられている」と紹介されている。文化13(1816)年頃成立した『薩隅日諸城記』にこの記述がある。

【史料1】

上代此城之持初ハ踏入五郎弘氏と云者也、是ハ諏訪家元祖、氏ハ三輪姓之人也

次に、「康正二年(一四五六)、伊東氏祐・北原貴兼は大隅に攻め入って、廻・敷根・上井を侵したが、島津氏九代忠国の攻撃を受け敗走した」とある。この記事は、『旧記雑録前編2』の康正2(1456)年3月である。

【史料2】

伊東大和守氏祐祐安ノ子、北原又五郎貴兼北原氏八世、と兵を會して隅州に入り、廻・敷根・上井今国分に属す、を侵す、忠國公輕騎を駆て是を逐ふ、正八幡の神官等大に起て賊を撃つ、氏祐・貴兼狼狽して遁る、忠國公軍を進め、遁るを追ひ、首千三百餘級を得て歸る、

次に、「島津氏十一代忠昌に与していた上井城主上井筑前守為秋は、文明十七年(一四八五)忠昌と対立していた帖佐城主島津忠兼の急襲を受け、城を捨てて敗走している。忠昌は諸将を率いて救援に駆けつけようとしたが、途中で上井落城の報せを受け引き返している」とある。これは、『旧記雑録前編2』所収の国史卷12圓室公1583の中にある文明17(1485)年の記事になる。

【史料3】

三月五日、島津忠廉攻隅州上井城、絶其汲道、十六日、守將棄城去、島津國久・島津忠福・北郷敏久・樺山長久・平田兼宗等、各引其兵救上井城、行至敷根、開城已陥而還、同上、上井城遺墟在国分郷地頭館東南一里計、係上井村、



第1図 上井城跡と瀧龍院跡位置図

さらに『載本田兼親譜1599』には、

【史料4】

十七年乙巳三月三日、依忠廉之催促、攻上井城有功、故同十九日、得敷根六町、

この他にも、『豊州家二代忠廉譜中』『正文在本田作左衛門宣親』に同様の記事がある。

【史料5】

今度上井城就退治、一段御動、誠為悦不少候、扱敷根六町進所也、

ここに登場する上井為秋は、上井覚兼の祖父にあたる。「諏方氏系圖」によれば、踏入五郎弘氏の9代目として上井為秋の名が登場しており、「地理志」によると、この頃は本田氏の支配下に置かれていたようである。

次に、「天文十七年（一五四八）、清水城主本田董親が島津貴久に反旗を翻したとき、上井氏は一時本田側に与していたが、のち敷根氏とともに島津氏の軍門に下っている」とあり、この記事は、『旧記雑録前編2』所収の『国史巻17大中公下2564』『貴久公御譜中2576』『樺山善久入道玄佐譜中2577』などの複数の記事に見られるものである。

【史料6】

天文ノ頃、本田氏ノ領トナル、同十七年田氏逆心ノ時、背之守護方ニ降ル、

『国分郷土誌』では、「一時本田側に与していた」と表現しているが、文明17（1485）年に島津忠兼に敗れたおり、本田氏の傘下になっていたのではないだろうか。この時の戦いにより、本田氏が敗れ庄内（現在の都城市周辺）に敗走し、清水城をはじめとする周辺一帯が島津氏の支配となる。この一連の事件に関して、新名氏は「大隅の“火薬庫”ともいうべき紛争地域であった大隅国府周辺は、島津貴久の親族や老中で固められ、一転して島津氏による大隅支配の一大拠点となった」と評している（新名2017）。

その後、『旧記雑録前編2』所収の天文22（1553）年の文書からは、城主が変わったことをうかがわせる。

【史料7】

是歳賜上井武蔵守董兼薩州永吉、董兼、為秋之子也

ここに登場する上井為秋の子上井董兼は、上井覚兼の父にあたる。別の史料では次のようにもある。

【史料8】

弘治三年比、島津右馬頭忠将清水・上井・下井ヲ領ス

若干の違いはあるが、天文22（1553）年から弘治3（1557）年までの間に、上井氏から島津氏に城主が変わったと言えよう。この時登場する島津忠将は、永禄4（1561）年に戦死しており、その後は、子の以久がその領地を引き継いだものと思われる。

しばらくは、上井城に関する記述は確認出来ず、次に確認出来るのは、それから30年後、「天正十六年（一五八八）、以久が子の彰久に清水を譲り、以久は上井城を居城とした」と紹介された記事である（三木編1979）。

【史料9】

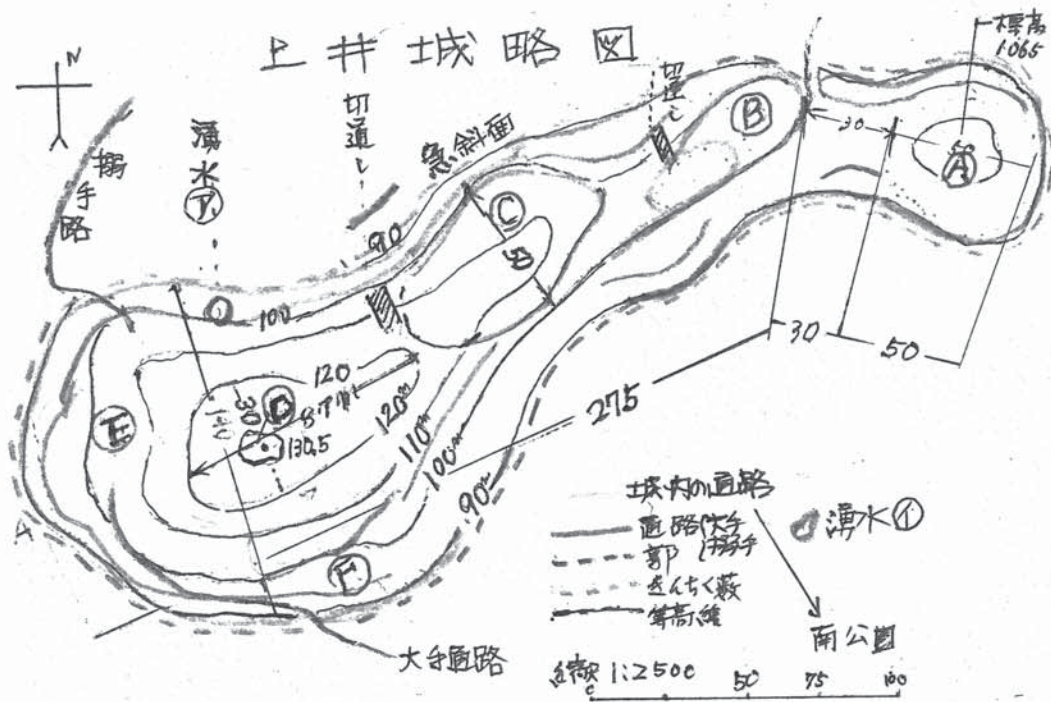
天正十六年、以久讓隅州清水於嫡子彰久、而移居於上井城、此歳 秀吉公賜判物、其文曰、

この記事からは、天正16（1588）年時点で上井城が存城していることがわかる。それ以降、筆者が調べた限り上井城の記述は見当たらないが（註3）、慶長の頃、薩州島津家の島津義虎に嫁いでいた島津義久の長女御平が上井に住む。慶長8（1603）年に御平が亡くなると、御屋地跡に瀧龍院が建てられる。現在、ここには御平の墓があり、上井城の麓にあたる（第1図）。義久晩年の居城である国分新城（舞鶴城）に近い点が注目される。

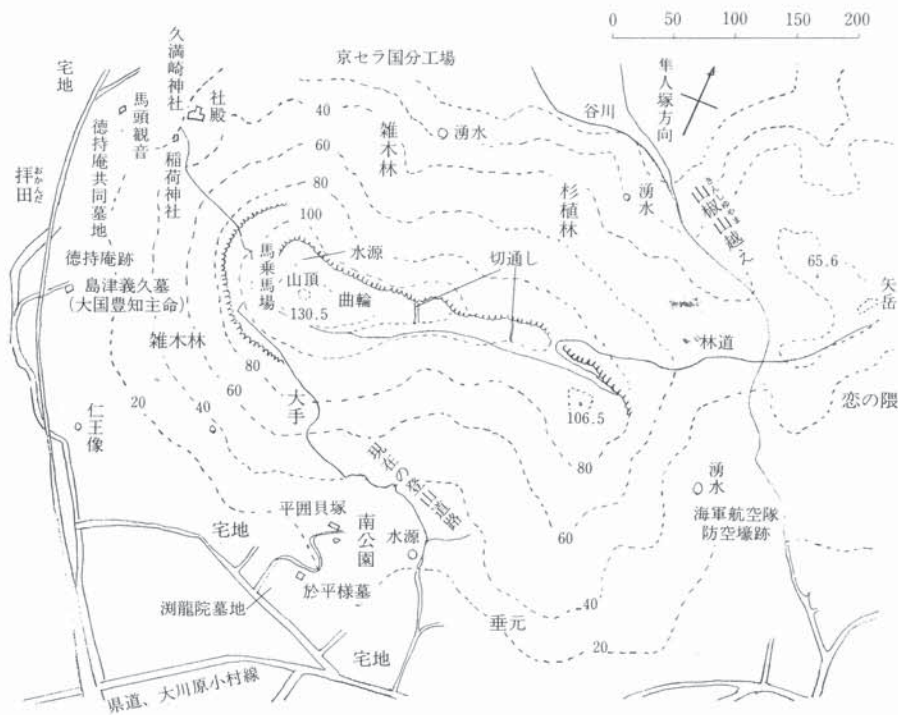
3 上井城跡の研究史

前節で取りあげた『国分郷土誌』が研究の基礎となる。『前国分郷土誌』で上井城跡は、「城としての規模はさして大きくない」と述べ、「城の様子をうかがうに足る遺構はほとんどない」と紹介されていた（国分市1973）。しかしながら、中世城館調査によって、本田潔氏による踏査が行われると、曲輪群が確認され、城としての様相が捉えられた（本田1984）。最終的な報告書では、これより簡略化された縄張り図が掲載された（鹿兒島県教委1986）。『国分郷土誌』もこの調査を元にして編集されていると思われ（国分市1998）、郷土誌編纂においても略測がなされている。現時点で、この3者が筆者が知り得た上井城跡の図面である（第2図1～3）。

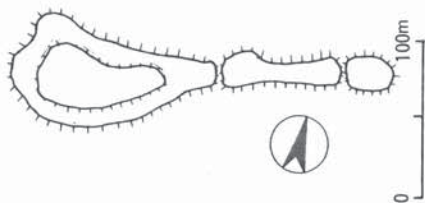
そして、上記以外で、研究されたものを確認出来なかった。大規模な戦闘や主戦場として登場することがほとんど確認出来ない状況であったためだろうか。「山腹には上井城の石垣が残っていたが整理され、南公園が新設されている」と郷土誌に取りあげられているが（国分市1998）、南九州において石垣を普請するようになるのは義久・義弘・家久期であり、少なくとも上井氏存城期とは考えにくい。この点に関しては、南公園建設時の資料等でその痕跡を把握する必要がある。この公園一帯は、上井城跡よりは低いが、検校川流域の低地部より高台となっており、何かしらの構造があってもおかしく



1 本田氏略図



2 国分郷土誌略図



3 中世城館略図
第2図 上井城跡略図

はない。

研究史とは異なるが、新聞記事としては、高木三志氏の紹介（高木1993）や、最近では上柿元大輔氏による『かごしま城巡り』による紹介（上柿元2023）などがあり、身近な城としての認知に一役買っている。

4 城の概要

上井城跡は、上野原テクノパークの展望台や城山公園から見下ろすことが出来、城が国分平野に接した丘陵の先端に位置することを容易にうかがい知ることが出来る。最頂部は標高約130mである。山裾南部には南公園グラウンドが整備され、ここから階段を使用して登城する。現在の遊歩道を葛折り状に登ると岩の露頭があり、左右に道が分かれる。中世城館調査では、AからFまでの地区に細分され、D区を本丸相当としている。耕作や公園整備によって当時の姿は改変されている可能性が高いが、現状を縄張り図として記録し、調査研究の足がかりとしたい。なお、本田氏の報告では今回紹介する西側部分のみが取りあげられているが、東側部分についても土塁状の痕跡などが確認出来ることから城の一部である可能性も高く、一連のものとして紹介していきたい。以下便宜上、現在の登城口から登った左右の分かれ道を1つの起点として、左手を西側曲輪群、右手を東側曲輪群と称しておきたい。両曲輪群共に、丘陵の細く連なる山頂部を利用した構造である。

西側曲輪群

曲輪1は、上井城跡の中で最も高いが、その山頂は東西約6m×南北約5mと狭く、三角点がある。南側中腹に祠がある。北側には貯水槽があり、裾部や斜面部は部分的に削平を受けている可能性がある。三角点から西側・北側と螺旋状に低くなり曲輪2と合流する。現状から、物見台的な役割が想定出来よう。

曲輪2は、祠のある山頂部（曲輪1）と比高差が約5mある。この裾から東西約30m南北20mの長方形の曲輪で、本田氏が指摘するところの本丸に相当する（本田1984）。

曲輪3は、曲輪2と比高差が約4mある。東西約34m、南北約20mで、縁辺部には土塁等の構造は確認出来ない。

曲輪4は、曲輪3との比高差が約3m。東西約20m、南北約17mと、曲輪2や3と比べてやや小規模の曲輪である。東側には幅約2.8mの堀切1で尾根が分断される。堀切に接する面も含めて土塁等の構造は確認出来ない。南北には旧園路のある帯曲輪が合流する。北側を帯曲輪1、南側を帯曲輪2とする。ただし、帯曲輪1・2は、後世のもの可能性も否定出来ない。

曲輪5は、曲輪4と堀切1で分断される。東西約20m幅16mで東側に虎口状の出入り口がある。虎口は幅2mで南に開口して90度屈曲する。その先は急峻に降り、堀切2で分断される。

曲輪6は、曲輪1の西側直下に位置し、目視であるが曲輪1との比高差は約10mある。本田氏はここを馬乗馬場と称している（本田1984）。この城跡の曲輪の中ではここだけが南北に細長い。

曲輪7は、東西に細長く、旧園路が斜面を登るように曲輪6へ続き、屈曲して曲輪2へ延びる。

曲輪8は、小区画に細分出来ると思われるが、竹林が深くて十分に観察出来なかった。北端が一番低く、久満崎神社へ続く入口とその前庭部となる。この入口付近では、岩盤が露出して障壁を成し、曲輪1直下で開口して旧園路が残る。久満崎神社方面から登城する場合、右に直角に折れ曲がる。虎口状とも見て取れる。その南側は、わずかな段が確認され、耳状ないしは逆3字状となる。南西部はその中でもやや張り出す地形となる。

帯曲輪1は、曲輪1から3の北側に位置し、旧園路がある。この旧園路を東側に緩やかに登ると曲輪4へとつながる。単なる園路とも思えたが、平坦面を有して曲輪4・8に接することから帯曲輪とした。

帯曲輪2は、曲輪7よりやや高く、落ち葉ではっきりとしないが高低差が作出されていると思われる。曲輪2・3の南側に延びて旧園路が連なり、曲輪4へ緩やかに登りながら合流する。竹木が深く、十分に確認出来なかったカ所もあり、いくつかに分かれる可能性もある。

曲輪9は、現在の遊歩道の分かれ道で、岩盤が露出しそびえ立つ。図面上では約10m四方の曲輪と見えるが、これは岩盤そのものである。その岩盤の南側に幅4m弱の平坦面があり、これが通路の役割を担う。曲輪とすべきか悩むところだが、岩盤に城の防御機能を期待したものであるとして曲輪で捉えておきたい。

東側曲輪群

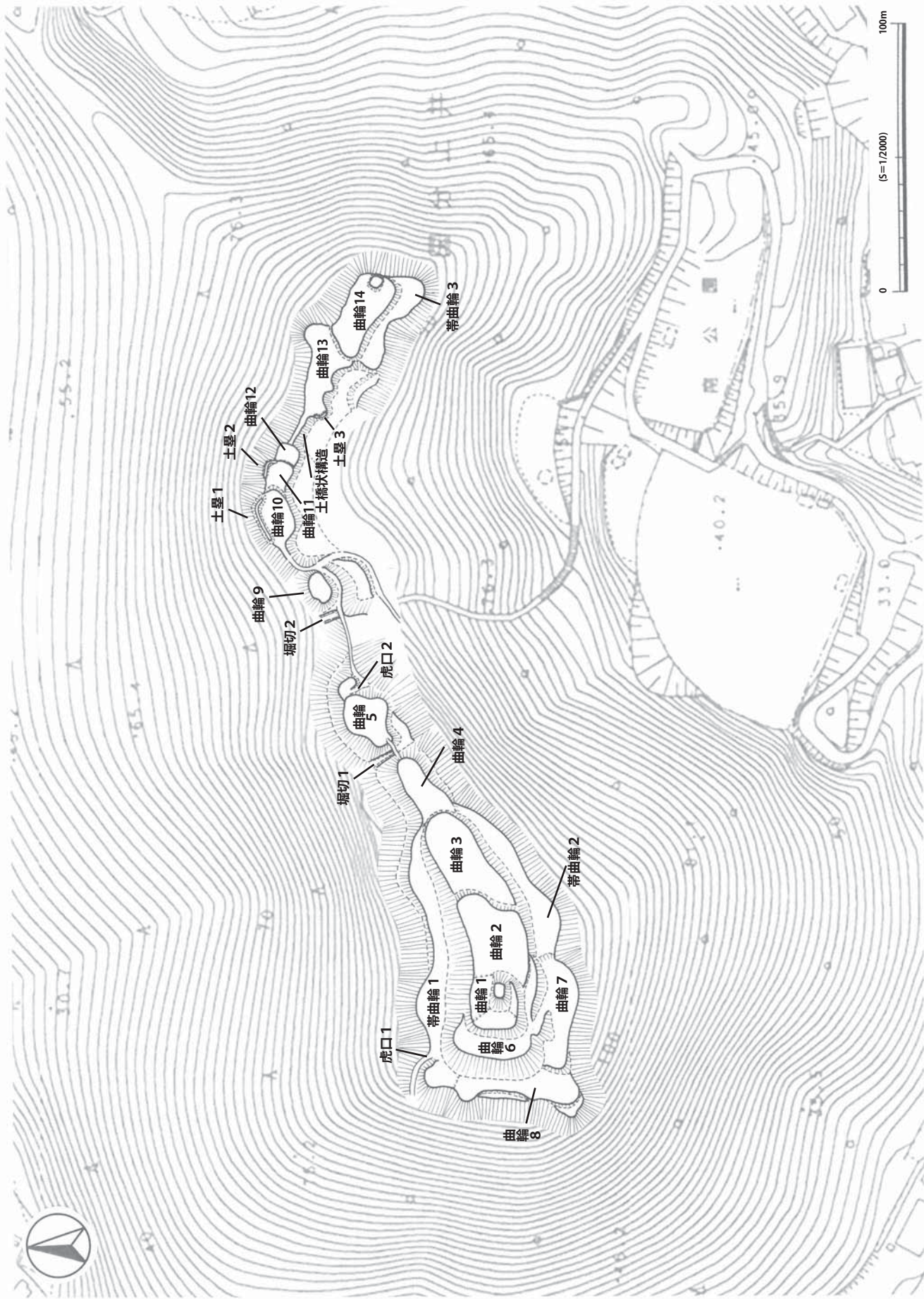
分岐より東側に位置する。分岐部分は窄まり、小さな馬の背状を呈して北側へ林道が降りながら延びている。この窄まった山頂部を東へ約10m程進むと、曲輪10となる。

曲輪10は、東西約17m程で北側に土塁1が確認出来る。この土塁1は、緩やかなL字状を呈する。

曲輪11は、北側には土塁2がややL字状に残る。東側で曲輪12と緩やかに連続する。

曲輪12は、10m四方の狭い平坦面で、東側には幅3m、長さ15mの土橋状の構造が続く。これは、上部に土壌などが集積しており、近年積み上げられたものである。その下部にある大ぶりの積石が往事のものかははっきりとしない。尾根筋を断ち切った堀切なのか、土橋状の構造で曲輪13や14へと一連の構造をなすか、今後検証が必要である。

曲輪13は、幅の広い尾根筋道である。北側には旧園路が残り、旧山道を生かしたものと思われる。途中危険な場所があり先の確認は出来なかった。南側に土塁3がある。このことから、不定形ながらも曲輪であると思われる。土塁3の南側には小規模な平坦面が段々に連なっ



第3図 上井城跡縄張り図

ており、耕作の影響が色濃く残る。これらの一部に、城の構造が残されている可能性も否定出来ない。

曲輪14は、城の東端部である。東西約30m南北約20mの平坦面があるが、東端に旧地形の高まりが残る。この構造がいつ頃のものであるかは不明である。この南側に、一段下がって東西約16m、南北約8mの帯曲輪3がある。

帯曲輪3は、中程で狭くなり断崖に直結する。これを挟んで2つに細分出来なくもない。検校川流域から敷根城周辺をうかがうには、曲輪14や帯曲輪3の東端が最も適していると言えよう。

このように、東側曲輪群は、土塁状の構造が残されているなど、城としての防御機能を有しているものの、1つ1つの平坦面は狭く、地表面は不安定に波打ち凸凹としている。山の南側斜面は、小さな面が段々に連なっており、耕作の影響を受けている。

一方、西側曲輪群は、堀切こそあるものの、各曲輪には土塁等の痕跡が認められない。後世の削平を受けている可能性もあるが、本来の特徴であるのか発掘調査を実施するなどして構造を明らかにしていく必要がある。また、現在の南公園からその裾野にかけての一带は、いわゆる館があったと目される。古地図では上井城跡は古城と記され、集落は城の南から東南部にかけての山裾にある。今回は、山頂部に残るいわゆる詰城としての上井城跡を扱ったが、平時の館や集落、生産基盤となる田畑などの景観についても視野に入れて研究を進めていくことが必要である。

5 おわりに

以上、上井城跡について縄張り図を作成し、いささか紀行文的になったが城跡の現状について曲輪ごとに紹介してきた。結果、これまで臆気ながら紹介されてきた上井城跡の全体像を概ね捉えることが出来たのではないかと思う。

多くの中世山城跡は、天守や高石垣を備えた織豊系城郭とは趣を異にした『土の城』である。一部でブームを得て来城者が絶えない城跡がある一方で、周知されないまま進入さえも困難な状態となっている城跡も多数ある。全てを整備することは困難であるが、往時を偲ぶ手段をどのように構築していくか今後の課題である。

中世城館調査は、昭和50年代に実施された鹿児島県全域を対象とした調査で、今日の南九州における城郭研究の基礎となっている。その調査カードを元に、『鹿児島県の中世城館跡』が刊行された。そして、調査カードそのものは鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され閲覧等が可能ではあるが、一般には余り知られていない。今回、上井城跡の縄張り図を作成するにあたって、この調査カードが大いに参考となった。三木氏は、中世城館跡調査の取り組みに関して「カードは活用が期待」され、「今後は等高線、字界、縮尺、方位を入れ、周囲を含める図面が必須である」と指摘する(三木2012)。

上井城跡の周辺には、敷根城跡や清水城跡などの中世城館が残されており、機会を捉えてこれらについても踏査報告を進めていきたい。今回の記録が、南九州の中世城館研究の一助となれば幸いである。

なお、小稿の一部は南九州城郭談話会第55回例会で発表した内容に加筆修正を加えたものである。発表に際しては、多くのご教示を得た。末筆ながら感謝したい。

註

- 1 日記に記されている城は、上井覚兼が地頭として在城した宮崎城に関するものが多い。千田嘉博氏(千田2004)や新名一仁氏(新名2018)によって詳細に述べられている。
- 2 国分郷土誌には3種類ある。平成10(1998)年発行の国分郷土誌凡例が、昭和48年刊行の国分郷土誌を『前国分郷土誌』とし、昭和35年刊行の国分郷土誌を『旧国分郷土誌』としており、小稿もそれに従う。
- 3 『上井覚兼日記』の天正12年12月14日の記事には、「財部上井之村」の記述がある。

【史料10】

彼上井之門之事、先祖為秋己来北郷殿より預候て格護之地二候、然二董兼上井ヨリ永吉へ移替之刻、兎角候て北郷殿被取返候、三ヶ年巳前又二拙者沙汰仕返、格護申候、

これは、宮崎城への帰路の途中で下井村を通過して、晩になりこの上井ノ村に着いたとある。筆者の憶測に過ぎないが、旅行行程から国分の上井ではないと思われる。

引用・参考文献

- 国分市(1973)『国分郷土誌』
国分市(1997)『国分郷土誌 資料編』
国分市(1997)『国分郷土誌 上巻』
本田潔(1984)「上井城」『中世城館カード』
千田嘉博(2004)「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 国立歴史民俗博物館
新名一仁(2017)『島津貴久 戦国大名島津氏の誕生』戎光祥出版株式会社
新名一仁(2018)「『上井覚兼日記』にみる土木事業 一城郭普請を中心に」『戦国大名の土木事業』戎光祥中世史論集第6巻 戎光祥出版株式会社
新名一仁(2020)『現代語訳 上井覚兼日記 天正十年(一五八二)十一月～天正十一年(一五八三)十一月』ヒムカ出版
新名一仁(2021)『現代語訳 上井覚兼日記2 天正十二年(一五八四)正月～天正十二年(一五八四)十二月』ヒムカ出版
高木三志(1993)「上井城跡」『さつまの山城』52

鹿児島新報1993（平成5）年8月9日月曜日（14）
三木靖編（1979）「上井城」『日本城郭体系』第18巻
株式会社新人物往来社
三木靖（2012）「鹿児島における城郭研究の歩み
（3）～南九州城郭談話会の歩みと展望のために～」
『南九州の城郭』第32号 南九州城郭談話会
上柿元大輔（2023）「上井城跡」『かごしま城巡り』
8 南日本新聞2023（令和5）年5月4日木曜日
鹿児島県教育委員会（1987）『鹿児島県の中世城館
跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（43）
栗林文夫（1997）「第V章文献史料からみた舞鶴城」
『本御内遺跡Ⅲ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘
調査報告書（21）鹿児島県立埋蔵文化財センター

出典史料

史料1 『薩隅日諸城記』
史料2 『旧記雑録前編2』1302号文書
史料3 『旧記雑録前編2』1583号文書
史料4 『旧記雑録前編2』1599号文書
史料5 『旧記雑録前編2』1551号・1600号文書
史料6 『旧記雑録拾遺地誌備考六』所収
史料7 『旧記雑録前編2』2701号文書
史料8 『旧記雑録拾遺地誌備考六』所収
史料9 『旧記雑録後編2』517号・518号文書
史料10 『上井覚兼日記』天正12年12月14日



①遠景 1 (南東：上野原台地より)



②遠景 2 (北：城山公園より)



③東西曲輪分岐点



④虎口 2 (西側曲輪群)



⑤堀切 1 (西側曲輪群)



⑥虎口 1 (西側曲輪群)



⑦土塁 2 (東側曲輪群)



⑧土橋状構造 (東側曲輪群)

図版 上井城跡主要写真

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第16号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年11月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
